



ノートは必ず見開きで

萩本欽一

私が子供の頃は戦後で、紙はまさに貴重品だった。ただ嬉しいことに新聞に入ってくるチラシ広告は表しか印刷されておらず、裏は白かった。そこで母親はその広告の印刷面を内側にして折って、漢字の書き取りや算数の計算問題を作ってやらせてくれた。母親は、

「これは遊びだから、おやりなさい」

という。というのも、間違えた問題は、その箇所を鉛筆で刺してひっくり返し、広告の部分を見る。とそこには「豚コマ35円」なんて出ている。そこからは連想で、「あっ、あの漢字は豚コマのところにあつたやつだー」と覚えるきっかけになるというわけだ。

最近のチラシ広告は両面印刷がされて

いてちょっとつまらないけれど、テレビ番組の企画書の裏側は、ほとんど印刷されていないので、今でも綺麗に折ってきちんと机の上に置いてある。ふと思いついた面白いことなんかをメモしておくのにちょうどいい。やはり紙は二回、三回と使いまわさないともったいない。昔、新聞紙などは弁当の包み紙によく使ったものだ。近ごろは、紙は回収されて再生される仕組みができていてほっとする。

先に書いたような面白い勉強法をやっていたせいか、台本の台詞も印刷されている漢字の部分だけを憶える、などという方法を編み出した。紙に印刷された漢字は、ひとことだけでいえば「強い」。だからぱっと憶えられる。あとのひらがなは適当に、と言うと聞こえは悪いが、アドリブで何とか乗り切るので。全部憶えてしまおうとロボットが喋っているようで、「欽ちゃん」では無くなってしまふ感じがするのだ。

四十歳を過ぎてから、自分のポキヤブラリーを増やすには、やはり雑誌を読むのが一番いいと気づいた。一つの記事も短いし集中して読めるのがいい。それと記事の終わりで、結論を断定せずに読者に考えさせるものが心に残る。記事の書

き手と読者の考え方、とらえ方のキヤツチボールというか、大人の関心みたいなものが感じられる。「——」とか「……」なんていう、ちょっと読み手に思考させる、情緒のある表現の仕方話言葉にはないから。

昨年、一念発起して駒澤大学の学生となって講義を受けているけれど、新しいノートを使うときはワクワクする。ふうーんと紙のいい香りがして「よーし、やってやろう！」という気持ちになる。

そして講義内容を書きとめるとき、ノートは必ず見開きではじめる。片開きのページから書きはじめると、目次を書いているような中途半端な気分になるからだ。同じ先生の講義でも新しい項目に入ったときは、たとえ見開きのページに余白があっても、次の見開きを使って新鮮な気持ちでノートをとっている。勉強のためだから、このくらいの贅沢はいいでしょう、と勝手に思っている。

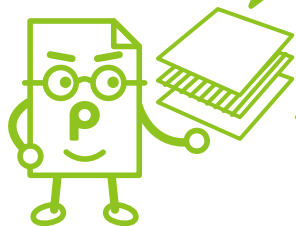


はぎもと・きんいち ● コメディアン、演出・脚本家。1941年、東京都生まれ。59年高校卒業後に浅草東洋劇場の軽演劇へ。61年自ら座長となり浅草新喜劇を作る。66年坂上二郎と「コント55号」を結成し、一世を風靡。解散後も「欽ドン!」シリーズや「欽ちゃんの全日本仮装大賞」などテレビでも大活躍。68年、ゴールデニアロー賞を受賞。以後計4回受賞。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

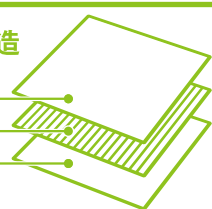
段ボールは、「3」がカギ。

1本ではもろい矢も、3本あわせれば強くなる。段ボールだってそうなんです。ライナと呼ばれる2枚のボール紙と、その間に入っている中しんと呼ばれる波形のボール紙。この3枚で支えあうことで、紙とは思えないほど頑丈に。なんと重さ1t以上のクルマを、段ボール4つで支えられるほどなんです。



段ボールの基本構造

- ボール紙 / ライナ
- 波形ボール紙 / 中しん
- 接着面



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、<http://kamitsubu.com/>「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。